令和２年度　中１ギャップ解消プログラム開発事業

通学合宿「うずしお交遊塾」　実施報告

１　趣　旨　　今日、青少年の問題行動やいじめなどが大きな社会問題となっている。その原因の一つに子どもたちの生活体験不足、家庭での親子のふれあう機会の減少、地域や家庭での教育力の低下などが指摘されている。

これらの課題解決を目的として、子どもたちが家庭を離れ、異年齢の青少年が集って共同生活をすることを通して、望ましい人間関係の育成や自主自立の精神を養う。

また、地域の安全・防災について、日常の備えや的確な判断のもと、主体的に行動することや災害時の助け合いの大切さについての理解を深める。

２　主　催　　独立行政法人国立青少年教育振興機構　国立淡路青少年交流の家

３　後　援　　南あわじ市教育委員会

４　日　時　　令和３年１月２０日（水）～２３日（土）　※３泊４日

※高校生リーダーは前泊（１月１９日）して事前研修を実施

５　場　所　　国立淡路青少年交流の家

６　対　象　　南あわじ市立南淡中学校区小学３～６年生

南あわじ市立三原中学校区小学３～６年生

兵庫県立淡路三原高等学校生（高校生リーダーとして）

７　参加者　　２０名（小学生１９名、高校生１名）

８　スタッフ　　国立淡路青少年交流の家職員、兵庫県立淡路三原高等学校生

９　日　程

					15:30		18:00	18:30	20:00	20:30	21:00
１月２０日（水）					受付・入所説明・自習		夕食	開塾式 ＜活動Ⅰ＞ みんなで仲良くなろう！ （自己紹介・交流会）	自習	入浴	就寝準備・就寝
	6:30	6:50	7:20		16:00	16:45	18:00	18:30	20:00	20:30	21:00
１月２１日（木）	起床	朝食	各学校へ登校	学校	交流の家着・自習	＜活動Ⅱ＞（前半） ３Ｄハザードマップ（立体）を作ろう！ ・自分たちのまちの地形を知ろう。 ・地域に潜む危険について考えよう。	夕食	＜活動Ⅱ＞（後半） ３Ｄハザードマップ（立体）を作ろう！ ・自分たちのまちの地形を知ろう。 ・地域に潜む危険について考えよう。	自習	入浴	就寝準備・就寝
	6:30	6:50	7:20		16:00	16:45	18:00	18:30	20:00	20:30	
１月２２日（金）	起床	朝食	各学校へ登校	学校	交流の家着・自習	＜活動Ⅲ＞（前半） 避難所運営を体験してみよう！ ・班のみんなと協力して避難所を作ろう。 ・避難所で一晩過ごそう。	夕食	＜活動Ⅲ＞（後半） 避難所運営を体験してみよう！ ・班のみんなと協力して避難所を作ろう。 ・避難所で一晩過ごそう。	自習	就寝準備・就寝	
	6:30	7:00		9:00			13:00		15:30	15:40	16:00
１月２３日（土）	起床・片付け	朝食（配給食）・片付け		＜活動Ⅳ＞ サバイバル食を作ろう！ ・班のみんなと火おこしや食事作り（昼食）に挑戦しよう。			＜活動Ⅴ＞ うずしお交遊塾をふりかえろう！ ・災害時に必要な物や能力について考えよう。		アンケート記入	閉塾式	解散

※高校生リーダーは、小学生就寝後に「スタッフミーティング」を実施。

① 前日研修(高校生リーダー)

セッション１では、ボランティアとその役割について考えた。事業のねらいを理解することや生活指導や健康管理・安全管理といった役割を果たすことの大切さについて理解を深めることができた。将来教員をめざす高校生だったので、真剣にメモを取って聞いていた。

セッション２では、参加者との交流会の進め方、役割分担などを考えた。職員から交流会の内容や進め方の提案に対して前向きに受け止め、子どもたちにわかりやすく伝える方法を練習している姿に、意気込みの強さが感じられた。

② 1日目 開塾式・活動Ⅰ：みんなで仲良くなろう!

「開塾式」では、所長から「防災」のそれぞれの漢字の由来から、防災の重要性や参加体験型の学習プログラムでの「チャレンジ」「ふりかえり」「言葉にする」という大切なキーワードが提示された。引き続き行われた「活動Ⅰ：みんなで仲良くなろう！」では、お互いのニックネームや意気込みを発表し合い、職員とリーダーで考えたレクリエーションを行った。最初、様子見をして重い空気になっていたが、レクリエーションをやっていくうちに交流が深まっていった。その後、防災クエスト・物の試練を実施し、災害時に１０種類ある持ち出し品のうち７種類を選び、何を持ち出し、なぜそれを持ち出すのかの理由も考えた。レクリエーションで盛り上がった雰囲気から一転、集中して黙々と考える姿が印象的だった。

就寝後のスタッフミーティングでは、今日の活動をふりかえり、「緊張したけど、何とかできた。」「メリハリをつけることが大事。」「集中力をいかに持続させるか。」等、成果と課題を挙げ、次の日に不安を残さないようにした。また、参加者の様子や参加者同士の関わりなどについて共有することができた。なお、このミーティングは毎晩行い、職員・リーダー間で情報を共有し、翌日以降の活動に活かすことを目指した。

(エピソード1)家庭的な雰囲気

参加者は、６時半に起床し、素早く身支度をすませて登校準備をした状態で食堂へ行き、朝食を摂る。出発時刻まで時間がない中、「忘れ物ない？」「急がなあかんよ。」など、参加者同士の関わりが見られた。

放課後迎えに行くと、子どもたちは「ただいま！」「お願いします。」と自らあいさつをして乗車してくる。迎える職員も「お帰り！」と声をかけ、家庭的な雰囲気で子どもたちを迎えることができた。参加者と職員の心の距離がグッと近づいた瞬間だった。

自習室では宿題や自習課題に取り組んでいた。リーダーや職員に教えてもらうだけでなく、互いに教え合っている姿も見られた。宿題や自習課題が終わった子は、別室で過ごせるよう配慮した。宿題を終えた子の中には、持ってきた本を静かに読書する子も半数近くおり、自習室は和やかな雰囲気だった。

③ 2日目 活動Ⅱ：3Dハザードマップ(立体)を作ろう!

「活動Ⅱ：３Ｄハザードマップ（立体）を作ろう！」では、兵庫県立淡路景観園芸学校教育研究部　景観園芸専門員　光成　麻美　氏を講師に迎え、立体的な地図を作製し、地域の危険箇所を推測することで地域の安全・防災について考える機会を持った。段ボールに等高線の入った地図を仮止めし、２０ｍ毎に段ボールをはさみやアートナイフ等で切り取り、積み重ねて糊づけする作業を４班に分かれて行った。最後は４枚の地図を合体して大きな１枚の地図になるよう仕上げた。前年度より拡大した地図で、事前に切り取る線を記入してくれていたので、子どもたちは作業しやすそうだった。例年、手を切ってケガをする子が絶えないようだったが、大きなケガもなく、集中して取り組むことができた。担当する地図によって早く終わった班もあったが、まだ作業をしている班の手伝いを自主的に始めるなど、協力する姿も見られた。

最終日には、自分たちの作った３Ｄハザードマップと高潮・津波のハザードマップを見比べるため、高低差のわかる３Ｄハザードマップで確認しながら、危険箇所についての理解を深めることができた。

(エピソード2)ケガ人ゼロへ

昨年度、３Ｄハザードマップ作りで手を切るケガをしてやる気を下げた子が今年も参加し、今回はケガをすることなく３Ｄハザードマップ作りを終えることができた。スタッフもケガをしないよう手の位置や刃の向きに注意するよう伝え方を工夫し、子どもたちも集中して取り組むことができた。協力して時間内に完成することができたというのもさることながら、ケガをしなかったという達成感もあったようにその笑顔から感じた。

④　3日目　活動Ⅲ：避難所運営を体験してみよう!

「活動Ⅲ：避難所運営を体験してみよう！」では、活動前半に南あわじ市危機管理部危機管理課係長　奈良　雄規　氏を講師に迎え、避難所運営する上で気を付けることについての話を聞いた。内容は、避難して来る人の特性によって避難する部屋を振り分ける考え方や、避難所でのルール作りや役割分担の大切さ等についてだった。その後、南あわじ市が購入したトイレカーの見学を行った。車いすの方も利用できるようリフトが付いており、２～３人ずつ乗ってリフトが昇降する体験もした。リフトの動き始めや止まる時、足を踏んばらないとバランスを崩す危険があることを実感できたようだった。

夕食後、避難所体験活動の班を相談して決め、どの班がどの部屋を使うか話し合ってから避難所の設営を行った。使える段ボールの量が限られていることや、研修室にある机・いすなども使用可としたこともあり、机をパーテーションに、いすを２列並べてベッドにし、そこへ段ボールを敷く子が多かった。通路を確保した上で寝る位置や向きをどうするかを考え、新聞紙を布団代わりにする子、段ボールで枕やいすを作る子など各自の発想で寝床が快適になるよう工夫していた。

新型コロナウイルス対策として換気のために窓を開けたままの状態で過ごすことにしていたので、体調が悪くなった場合はそのことをスタッフに伝え、リーダールームや特２研へ避難できることを伝えた。だが、全員が自分たちの避難所で一夜を過ごすことができた。

翌朝、お互いの避難所を見せ合い、それぞれの特徴についての気付きを共有した。自分たちが思いつかなかった考えを知り、今回の経験を次の機会に活かしていこうという意欲が感じられた。また、朝食は菓子パン２個とバナナ１本、パックジュース１本という避難所で実際にあり得る食事を体験し、避難所での朝の雰囲気を実感できた。

(エピソード3)共助の実践

「こっち持って。」「そのいす向こうに運ぶから手伝って。」避難所を設営するのに班で協力する中で、やりたいことや、やってほしいことを言葉にして伝え合えるようになっているのを感じた。また、「リーダーの分も、僕たちが作る。」と自分たちの寝床だけでなく、リーダーの分も作った班があった。その部屋は着替えスペースも作り、自分たちの寝床に名札を付けて誰が使っている場所かを示す工夫もされ、他に避難して来る人のことを意識した避難所になっていた。

⑤ 4日目 活動Ⅳ：サバイバル食を作ろう！

「活動Ⅳ：サバイバル食を作ろう！」では、ポリ袋に入れた食材を湯煎調理するパッククッキングでカレーライスを作った。災害発生時に水の使用が制限されることを想定し、班で調理に使える水の量を８Ｌに制限した中で野外炊飯を行った。どの班も水を節約しようと、食器や食材を溜めた水でまとめて水洗いしていた。鍋の湯が蒸発して残りの水が少なくなってきた班に、水を残している班が分けてあげる姿も見られた。また、以前パッククッキングを自然学校でやったことがある子が鍋の管理を自主的に行い、自らの経験を活かしていた。「これ片付けするの一緒にしよう。」と仲間を誘って作業をするなど、班で協力する姿も見られた。

（エピソード4）職人技

野外炊飯では、ライターやマッチを使わず、火起こしをメタルマッチで行った。かまど係の子に事前の説明を一通りした後、早速実践に移った。

雨で説明中に火がつきにくかったので、できるかどうか心配したが、自分たちの力で火起こしができた。本事業もそうだが、他の事業でも火起こしにメタルマッチを使うことが増えてきているので手慣れた参加者も多く、これまでの経験を活かせた場面だった。

⑥ 4日目 活動Ⅴ：うずしお交遊塾をふりかえろう！

「活動Ⅴ：うずしお交遊塾をふりかえろう！」では、２日目に完成させた３Ｄハザードマップと高潮・津波のハザードマップを見比べて、土地の高低差による被害の違いや高潮と津波で地域により被害が違うことを確認した。また、避難所体験の感想を共有し、避難所でのルール作りや役割分担の大切さに気付くことができた。

最後に３泊４日の活動を体験した上で、これからどんなことをするのかという“アクション宣言”を一人ひとりが考え、発表した。「災害が起きた時のために防災バッグを確認する。」「もし災害が起きて避難してきた人がいたら、段ボールベッドを作ってあげたい。」など事前の備えの大切さに気付き、今回の体験を活かしていこうという姿勢が見られた。今後も今回の活動で身につけた「自助」「共助」について、忘れずに実践していくことを確認して全日程を終了した。

⑦ 事後のふりかえり（高校生リーダー）

リーダーは初参加の高校生だったので、最初戸惑いなどから硬さが見られ、小学生と関わることへの不安を口にしていた。「全てを手伝うのではなく、子ども自身でできるようにサポートする。」という姿勢を貫いて、指導するべき場面と見守るべき場面の区別ができるようになり、日ごとに子どもたちとも馴染んで人間関係を築いていった。

手出し口出しをし過ぎず、子どもたちをサポートすることの難しさや大切さ、子どもたちの成長を共に喜べる楽しさを経験できたこと等を今後も活かしていこうという前向きな意見が聞かれた。

(エピソード5)中学校へ行っても

最終日になり本事業の終わりが見えてきた頃、６年生を中心に「中学校へ行っても交遊塾に来たい。」「中学生は参加できないの？」という声が聞かれた。４年連続本事業に参加している子など複数回参加している子にとっては恒例行事のようになっているので、来年も参加したいという気持ちから自然と出てきた言葉だったように思われる。本事業が積み重ねてきたものが、子どもたちに定着してきているのを感じると共に、来年度の募集対象を検討する必要性を感じた。

１１　参加者の声

＜小学生の感想＞（事後アンケートより抜粋）

〇自分が知らなかったことを学べて良かったと思った。
〇ダンボールベッドでみんなと協力できて、楽しかった。
〇毎年ちがう内容で、楽しかった。

＜高校生リーダーの感想＞（事後アンケート、ふりかえりシートより抜粋）

〇次にする行動を子どもたちにうながすことができた。
〇個性のある子や苦手意識を持っている子を多く褒めることができた。
〇１人１人に深く関わることも大切だが、集団全体を見られるようにしたい。

１２　成果と課題

【アンケート調査票から】

事業の総合評価では、「満足」「やや満足」と回答した小学生、高校生リーダーは 100%という結果から、活動全般に満足していることがうかがえる。活動内容についても「満足」「やや満足」と答えた小学生、高校生リーダーは 100%と、高い満足度があったものと考える。

【通学型の合宿だからこそ見えるもの】

通学型の合宿は、昼間は学校で勉強し、夕方交流の家に帰って来るといった特徴があり、子どもたちにとっては、「家」のように感じられたのではないかと思う。「ただいま！」と事務室の職員に元気な声で挨拶する子どもたちの姿や「お帰り！」と温かく迎える職員の姿は正に「家」そのものだった。

参加者が学校に行っている間に、スタッフ間でスケジュールの確認や問題点の修正ができることもこの事業の特徴である。運営側が情報共有しサポート体制を作れたことは、参加者にとって安心感を得られたのでないかと感じた。用具の片付け、偏食、身の回りの整理整頓等、生活面で気になることもいくつか見受けられたが、声かけをすることで少しずつではあるが変容していく姿が見られた。

今後は、こうした学校や家庭では見ることができない子どもたちの成長する様子を共有できる体制を整え、参加者のより良い支援の在り方について検討していく機会を設けたい。

【防災プログラムの活用】

◆「防災」への意識を高める体験活動

「防災クエスト・物の試練」では、避難時の持ち出し品の選択を行った。持ち出し品を選んだ理由も考え、意見を共有することで自分が考えていなかった持ち出し品の使い方や何を大事にするのかという優先順位のつけ方の違いを知る機会となった。

「３Ｄハザードマップ作り」では、４グループでマップを作製した。誰がどの線に沿ってパーツを切るか役割分担し、長時間、最後まで集中して作業に取り組むことができた。前回より地図の縮尺率を大きくし、切る部分を事前に色付けするなど、時間内に完成させるための工夫をした。完成したハザードマップは、振り返りの場面で、立体地図だからこそ視覚的に理解できる良さを感じることができた。

「避難所体験」では、学校の教室を避難所として利用する場合を想定して、自分たちで部屋割りし、寝床を作り、実際に一夜を過ごす活動を行った。机・いすの移動や段ボールの運び込みなど仲間と協力しながら活動する必要があったが、どの参加者も自主的に取り組み、コミュニケーションをしっかり取って作業のイメージを共有し合って進めていた。

初めての体験で不安だったが完成できたという達成感から、「段ボールベッド作りが楽しかった。」という感想や「災害が起こったら、段ボールベッドを作れるようがんばる。」というアクション宣言に繋がったと考えられる。

【望ましい人間関係の育成】

◆交流の家での活動を通して

参加者は昨年の事業に参加した子が多かったが、活動を通して新たに人間関係を築いていった。特に３Ｄハザードマップ作りや避難所運営では、お互いに役割を分担し、協力し合いながら完成することができた。みんなで力を合わせることの心地よさや、責任を果たして感謝される喜び、不安の中でやり遂げた達成感を味わっていたようであった。

「中学校へ行っても参加したい。」という声が出てきたのは、中１ギャップ解消という観点からも効果があったと思われる。

【より充実した事業にするために】

◆学校、関係諸機関等との連携

事業前、各学校に「うずしお交遊塾」のご紹介をさせていただき、本事業へのご支援・ご協力をお願いする機会をいただいた。事業中も、登下校時の安全面のことや登下校時刻についてご意見をいただき、通学路のパトロールやスケジュールの調整を行うことができた。

兵庫県立淡路三原高等学校には、４泊５日（事前研修で前日に１泊）という長期のボランティア活動でありながら、本事業への参加にご協力をいただいた。

３Ｄハザードマップ作りや避難所運営では、外部講師を招き、防災を切り口にした本事業の趣旨に迫ることができた。

今後とも、各学校や関係諸機関等と連携し、事業内容について検討を重ね、中１ギャップ解消プログラム事業として、更に実用性・汎用性のあるプログラム内容となるよう改善していきたい。

主　催　　国立淡路青少年交流の家
〒656-0543　兵庫県南あわじ市阿万塩屋町 757-39
TEL 0799-55-2696　FAX 0799-55-0463
https://awaji.niye.go.jp

体験の風をおこそう